

ロザリー After story

作： Rei..HLfH.

「睦月ー待ってよー！」
「ばかもん、お前が帰ってくる前にちゃんと連絡よこさないからだ」
俺とロザリーは、今とある駅のホームを走って移動している。
ロザリーには悪いが、最悪のパターンを回避するためには仕方の無い事なんだ。

このままだと、実家に着くのは夜中になってしまう。
実家のある地方には、街灯という小洒落た物は無い。
オマケに5年間帰ってなかったせいで、道なんてそこに行ってみなきゃ分らない。

そして、そこに行っても真っ暗だとどうにもならない。
これが最悪のパターンだ。

次はあの電車だ。
ピルルルルルルル!!
やべえ、発車する!!
「ロザリー、あの電車に飛び乗るぞ！」
「え？う、うん！」

ダダダダダ!!
シュー...パタン
何とか駆け込み乗車で電車に乗り込む。
「ふい～、何とか間に合ったか...」
「はあ.....はあ...」
「ロザリー、大丈夫か？」
俺と違って、ロザリーは全力で走ったおかげでクタクタになっていた。
「い...一応...」
「そうか、...にしても悪いな、帰ってきたばかりなのに」
「ははは...いいですよ。私は睦月に着いて行くだけですから...」
「んなこと言われてもな...。とにかく、スマン」
「んー.....」
ロザリーはどうしたものかと首をかしげる。
ハッと、何かを思いつくと、すぐその後に笑顔で俺に言った。
「分かりました。許しますね」
「つぶ...」
可笑しい返事は、俺の笑いを誘った。
「笑うなんて、ひどいです」
「スマンスマン。さて、座るか」
俺とロザリーは、貸し切り状態の車両を見つけ、座ることにした。

「やっぱこう座らなきゃ、雰囲気出ないよな」
向かい合った椅子に、ロザリーと向かい合って俺が座る。
「うーむ...。あっちから来る時、この景色を見たはずなんだが、まったく覚えてねえ」

窓の外の風景を見ながら、つぶやく。
「それは5年も経てれば、誰だって忘れちゃいますよ」
「感傷にふけようと思ったんだけどなあ...」

「私を置いてけぼりで...ですか？」
「一緒に感傷にふけようぜ」
「ははは、バカ言わないでくださいよ」
「む、バカとは何だ。はははは」

「少し長旅になる。次降りる駅で駅弁買って食おう」
俺は横に置いたボストンバックから、カメリーメイトを取り出して、ロザリーに1ブ
ロック渡した。

「それまでは、コレで空腹紛らわしてくれ」
ロザリーは受け取ったカメリーメイトを見つめる。

「これは...睦月がよく食べてる物ですか？」
「そうだ。結構美味しい物だぞ」
「...実家に着いたら、栄養管理が必要ですね」

言いながらパクッと一口齧る。
俺も慣れ親しんだ味を楽しむ。

「ソグソグ...」
「...そんなに噛まなくてもいいんじゃないか？」
必要以上に咀嚼するロザリーに、ツッコミを入れる。

「...コク...。不味くはない...かな？」
「大人の味が分ってきたじゃないの」
「美味しくもありませんが」

ピシャリと否定される。

「厳しいねえ...」
「当然です。実家ではちゃんとした食事を取ってもらいますからね」
「言われなくとも」

「...そういえば睦月。実家と言うと、睦月のご両親と同居と言う事になるんです
か？」

「そこら辺は手を打っている。いきなり幼女を連れて実家に帰るような人間じゃない
からな」

幼女を彼女です。とかいった日には、警察か病院、最悪獄中だ。

「とりあえず、近所のアパートを取ってもらったよ」

「はあ...よかった」
「ロザリーが成長したら、一緒に挨拶しに行こう」

「はい！」
「うむ、いい返事だ」

「ふふ...」
「ははははは」

その後、俺はロザリーに、地元で行われる行事や伝統などを覚えている限り教えた。
ロザリーは熱心にそれを聞き、笑顔を絶やす事は無かった。

窓の外を見る。
傾き始めた太陽が眩しいくらい光っている。

実家に着く頃には夕暮れか。
「ロザリー、着くまで休んでていいぞ？」

「...スゥ...スゥ...」
「言われなくとも...か」

俺の上着をロザリーにかける。
「あのときの寝顔と変わらないな、言っちゃあ何だが幸せそうだ」
変わらない...か。

俺はこの5年間で何か変わったのか？
右手の能力を失っただけで、戻ってきただけなんじゃないのか...？

ゴト!!
「ソ...

電車の振動でロザリーが起き掛ける。
だが、すぐに眠りに落ちてしまう。

「ははは...バカだな...俺」
思わず自嘲してしまう。
5年前の俺は一人だったが、今は隣に自分のことを好きでいてくれる人がいる。
それで十分じゃないか。
これから変わって行っても遅くは無い。
自分のためにも、他ならぬロザリーのためにも。

「そうだな。まずは親父に自家栽培のノウハウを教えてもらうか」
「それからお袋に、...まずは料理を習うか。いや、家事全般かな」
「あいつには...、デッサンの仕方教えてやるか...」

俺のやるべき事、ロザリーのために変わる事。
そして、ロザリーと変わらない時間を過ごす事。
まだ青い空を見ながら、俺は胸に誓う事にした。